2012年度 修了

幼児期から児童期前期の子どもにおける同性カップルへの理解と感受の発達的変化
― 同性カップルを描いた絵本の読み聞かせを通して ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
佐々木　幸子

同性愛者は異性愛が主流派の世界ではマイノリティであり，同時に同性愛者は偏見を持たれていることが多い。現在までに行われた調査では，大人は，同性愛者に偏見を持っているということが明らかにされている。しかし,同性愛者への態度が調べられているのは，青年期以降が多く，幼児期や児童期の子どもがどのような態度であるかは，ほとんど分かっていない。そこで，本研究では，幼児期から児童期前期にかけての子どもの同性カップルに対する感情を調査した。対象児は，4歳児・5歳児・小学1年生・小学2年生の各10名の計40名であった。

幼児・児童の認知能力を考慮して，まず導入として，同性カップルが描かれた絵本を読み聞かせ，内容理解・登場人物の心情・意図理解を尋ねた。加えて，絵本に登場する同性カップルの関係をどのように捉えるのかも確認をした。この本の内容は，動物園で二匹のオスペンギンがカップルとなるが，たまごが産まれなかったため，飼育員が他のペンギンから産まれたたまごを二匹の巣に入れてあげ，赤ちゃんが誕生するというものである。
絵本の内容理解では，4歳児では50%，5歳児では80%，1年生・2年生では100%が理解していた。心情理解に関しては，4歳児では，心情を答えることに困難を抱えている様子が見られたが，5歳児以降は答えられていた。意図理解に関しては，5歳児でも答えることが難しい様子もあったが，就学児童は回答できていた。

二匹のオスペンギンの関係について，自由に回答することを促した場合，4歳児・5歳児は80%以上が無回答であった。1年生では50%が無回答であったが，仲良しという関係を答えた児童も見られた。2年生では，80%の児童が友達や仲良しなどの関係を答えていた。関係性を尋ねる際，友達か友達ではないかという二つの選択肢を提示した場合，5歳児の20%，1年生の10%は，友達ではないという選択肢を選んでおり，少ない割合ではあるが，オスとオスが友達ではないことを感じとる対象児も見られた。

二匹のオスペンギンと誕生した赤ちゃんペンギンの関係を尋ねた際，二匹のオスペンギンのことを，1年生・2年生は父親と父親と表現したが，5歳児は父親と兄と表現することがあり，4歳児では父親と母親と表現することが多かった。

読み聞かせ終了後，対象児自身の父親と母親を思い浮かべてもらい，それが父親と父親または母親と母親であった場合はどう思うか尋ねた。幼児では，父親がペアの場合は食事面に不安を感じ，母親がペアの場合は金銭的な問題を答えるなど，性役割に焦点が当たった回答が多かった。しかし，児童では結婚式で男が二人出てきたらおかしいなどの同性がペアであることに焦点が当たった回答が見られた。さらに，どうして男と女が一緒に暮らすのかという異性愛への根本的な問いを見出す児童も見られた。